



書評 中田英樹『トウモロコシの先住民とコーヒーの国民：人類学が書きえなかった「未開」社会』

小澤，卓也

(Citation)

歴史学研究, 919:51-54

(Issue Date)

2014-06

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002883>



書 評

中田英樹『トウモロコシの先住民と
コーヒーの国民——人類学が書きえなかった
「未開」社会——』

小 澤 卓 也

南北アメリカ大陸の結節点にあり、わずか数十キロの陸地を隔てて太平洋と大西洋（カリブ海）に接している「世界の十字路」たる中米地峡は、一方で近代以降もマヤ系を中心とする独特の先住民共同体を抱え、他方では両大洋を連結する運河の建設をめぐる欧米列強の争奪地となるなど、世界史上きわめて興味深い地域である。それにもかかわらず、今のところ日本では、この地域に関する歴史・社会研究の十分な蓄積は見られない。本書は、中米のグアテマラ共和国にスポットライトを当てつつこうした知的空白部分を補完し、なおかつ既存の「辺境社会」研究のあり方をも問い直そうとするじつに意欲的な学術書である。まず本書の内容を簡潔に紹介しておきたい。

I

序章を含む全4章と「はじめに」および「おわりに」（計248頁）で構成された本書は、20世紀前半のグアテマラ・アティトラン湖畔に点在するパナハツチェルやサン・ペドロなどの先住民村落で実施された、アメリカ人研究者による人類学調査の有効性に疑問を呈するところから始まる。著者はソル・タックス（グアテマラでの調査をまとめた著書『一銭資本主義』で知られる）らこの調査に関係したシカゴ大学の人類学者たちの動向を歴史的文脈に沿って整理した上で、彼らがありのままのグアテマラ先住民を研究対象とはせず、欧米社会を優位とする資本主

義論に立脚しながら、発展途上地域を支配するのに都合のよい機能主義的な「他者理解」の学問として人類学を構築したのだと指摘する。著者はこの先住民を見下すような観察眼を「鳥の眼」として批判し、そこから現地社会を本質的に理解するために肝要な情報が削除され、こぼれ落ちていくことに警鐘を鳴らす。

この問題点を克服するために著者は、地を這いつくばって生きている現地人に寄り添った視線と感性の反映された「虫の眼」から先住民社会を再考すべきだと主張する。そして、その優れた観察眼を備えた人物として、タックスの調査協力者として情報収集に奔走すると同時に、タックスから不要として捨てられた情報をむしろ重視して独自の研究を続けたホアン・ロサーレスについて詳述する。ロサーレスは人類学を知らぬ現地生まれの先住民であったが、彼こそが誰よりも本来的な人類学的思考を有していたのだという。特に著者が注目するのは、サン・ペドロ村の土地利用状況について調査を依頼されたロサーレスが、他県に属する南部平野部の諸村を執拗に調査対象とした点である。

もともとサン・ペドロ村民は、自民族の神話的な起源や伝統文化と深く関わるトウモロコシを自給して暮らす先住民であったが、19世紀後半に重要な国家財源となったコーヒー生産業の拡大に伴って土地を収奪された上に、コーヒー農園での労働を強制されたため、新たな耕地を求めて現地で「パマシャン」と呼ばれる村落周辺の荒蕪地へと進出せざるを得なかった（この苦難の歴史を軽視し、「多文化主義」を謳い文句に先住民文化を商品化して経済的利益を上げる現在の観光産業に対しても著者は批判的である）。特に多くのサン・ペドロ村民が農地を獲得した場所が、後に新たな村落となるクツァンであり、著者はこの新村がサン・ペドロと柔軟かつ互換的な関係性を維持した点をこの地域の先住民共同体の特色だとしている。ロサーレスが現地人の目線で調査を行ったからこそ、国家の行政区画には収まらない土地・共同体意識に着目し得たというわけである。

すなわち、クツァンなどに新たな土地を確保した「トウモロコシの先住民」たるサン・ペドロ村民は、国家によるコーヒー農園での強制労働を課せられた

後も食料の自給を継続することができたのであり、「コーヒーの国民」へと変貌して国家に絡め取られることはなかった。しかも当時のサン・ペドロ村民は借地と所有地を明確に区別せず、パマシャンのような所有権の曖昧な土地へと自由気ままに耕地を拡大する、「近代化」や「資本主義」の枠組みでは理解できない人々だったという。こうして著者は、「虫の眼」を欠いた人類学者による経済的合理性論（「モラル・エコノミー」論や「緑の革命」論などの開発経済論へと繋がる）では、アティトラン湖畔の先住民社会を本質的に理解し得ないと結論する。

II

本書を精読して強く印象づけられたのは、著者がまずもって地道な「人類学的研究」を経た上で、シカゴ大学系アメリカ人類学者の見落とし（とされる）現地人の社会観や歴史認識に関する資料（文書および著者自身によって記録された村人の証言）を拾い集めて立論している点である。特に当時を生き抜いたサン・ペドロの高齢者たちからの聞き書きは、その頃の先住民社会の実態を彼ら自身の目線から考察するための稀少な資料として価値がある。また著者は、ロサーレスの書簡やドラフトもていねいに読み込んで整理しているが、これも欧米の学問に直面した先住民の率直な疑念や苦悩が示された貴重な歴史資料だといえる。こうした一次資料をもとに、20世紀前半のグアテマラ先住民社会に関して真正面から論じた研究は、私の知る限り日本ではほとんど例がない。その意味で本書は、これからマヤ系先住民の研究を志す者にとつての基礎的な日本語文献となりそうである。

また本書は、人類学に対してだけでなく、既存の中米史学研究上の通説に対しても再検討を求めている。1871年以降のグアテマラにおけるコーヒー農園の拡大は、明確な土地所有意識を持たなかった先住民の食料自給用の土地が欧米資本家や国家権力者と結んだ白人系エリート層に奪われ、近代的な土地登記制度のもとで国家財政を支えるためのコーヒー生産地へと変えられる過程として説明されることが多い。そして食料自給が不可能となった先住民は、強制労働を課せられつつコーヒー資本主義経済に組み

込まれ、組織的に搾取される労働者へと変貌するという。彼らがこの苦境を回避するには、コーヒー生産地帯から逃亡して国家による監視の目の届かない辺境地に避難して暮らすしかなかった。結局、コーヒー経済に組み込まれた多くの先住民の生活は激変し、強制労働制の廃止後も多くの先住民が貧困に苦しむか、生活の不安定な季節労働者となって国内をさまようことになるというのが、多くの研究者たちの主張である。

しかしながら、著者によれば、南部平野のコーヒー農園における強制労働を命じられたサン・ペドロの先住民は、実際にはクツァンなどかつてパマシャンだった自村の周辺地域に新たなトゥモロコシ畑を確保し得たのであり、必ずしも典型的な「土地なし農民」や季節労働者と化したわけではなく、土地と密接に結びついた伝統文化やコフラディア（カトリックの聖人・聖像崇拜を中核として運営される、村民の日常的信仰やアイデンティティを規定する宗教・村政組織）も維持されたという。つまりサン・ペドロの先住民は、押し寄せる近代化と資本主義化の渦に巻かれつつもそれに完全に吞まれてしまうことはなく、村の空間認識さえも柔軟に変化させながら逞しく生き抜いたというのである。

そうだとすれば、タックスらがグアテマラ国家によって確定された行政区画としてのサン・ペドロ村のみを調査の対象としたのは、こうした現地感覚の欠如が招いた失策だということになる。しかも本書で指摘されているように、その後のアメリカ人類学会がこの調査結果を再検証しないまま、先住民たちを「理解する」ための人類学が構築されたのだとすれば、じつに深刻な問題である。また著者は、欧米中心主義的な資本主義論の安易な適用では、欧米的な土地所有概念や空間認識を持たないサン・ペドロ先住民とその社会的特色を理解することはできないと主張しているが、これはこれまでのグアテマラ社会経済史研究のテーマが、一方でコーヒー資本主義の拡大による伝統的先住民村落の破壊に向けられ、他方ではそれとは正反対に先住民のコーヒー資本主義への順応を課題としてきたことに対する痛烈な批判ともなっている。これらの点でも、本書の内容はじつに挑戦的である。

Ⅲ

さらに本書は、今後さらに解明されるべき重要な課題をいくつか示唆しているが、ここでは中米先住民研究にとって特に重要だと思われる2点について解説しておきたい。まず、パマシャンをいかに定義するかという課題があげられる。サン・ペドロ先住民に特徴的な土地観念の柔軟性を強調するために、著者はパマシャンを「論理的に存続不可能な〈共有地〉」（186頁）、「誰にもアクセスの開かれた荒蕪地」（200-201頁）、「正体不明の地」（244頁）、「定義できない南部の地」（244-245頁）などと表現し、おそらくは意図的に明確な定義づけを避けながらその概念に奥行きを持たせている。

だが、本書で議論されているパマシャンとは、メキシコ近代史の過程でも問題となった「エヒード（入会地）」の一種だと考えられる。グアテマラ先住民も、日常的な共有地（居住地や耕地など）のほか、水源や材木などの資材を確保したり、家畜を飼ったりする森林や草原などの使用を植民地時代から認められていた。まさにエヒードである。その最辺境部には、支配者たるスペイン人だけでなく先住民からも軽視されていた未開地が存在しており、この領域の所有・使用権が行政（市町村）側にあるのか、先住民側にあるのかは、たいてい不明確であった。ところが、アティトラン湖周辺がコーヒー栽培に適するとわかると政府は先住民の耕地を奪ってコーヒー農園に変えていったため、先住民たちはこのエヒード奥地に進出して少しでも伝統的な生活を維持しようとしたのだろう。

本書で提示された情報、たとえばパマシャンという言葉は本来「マシャン（現地民の生活と関わりの深い植物）の向こう側」（182頁。つまり日常生活領域の外）という意味であること、またロサーレスがサン・ペドロ村民は「かつてはすべての土地が共有だったから」（186頁）クツァンの土地を手に入れたと述べていることなどからも、パマシャンがエヒードだったことが窺われる。要するに、所有・使用権が不明確だったエヒード奥地に、近代的な所有概念のない先住民が進出し、そこに政府が近代的な土地所有制度を強制適用したことが、土地概念の混

乱と曖昧さの背景にあったといえる。これらを踏まえ、メキシコのエヒードに関する歴史研究など他国の事例を参照しながらサン・ペドロの土地資料を再整理することで、バマシヤンをより明確に定義し得るのではないだろうか。

本書の示唆するさらに重要な課題は、かつてのバマシヤンに誕生したクツァンなどの新集落とサン・ペドロとの関係性の明確化である。現存する資料が少ないのを承知で著者は果敢にその解明に取り組み、かつてサン・ペドロやクツァンを含む広範な地域を支配していた先住民国家のツトゥヒル王国に言及したり、サン・ペドロとクツァン両村間にまたがり、私財を投げ打って等しく両村のコフラディアに貢献しようとする先住民たちの営みを浮き彫りにしたりしながら、両村をともに互換的な開放系に位置づけ、オープンで平等な関係だったとする興味深い議論を展開している。これは本書で強調されている先住民の創造的で柔軟な世界観と深く関わる重要な論点である。

しかしながら、ツトゥヒル王国に関する学術研究自体があまり進んでいない現状や、両村間の移民の内訳が不明な点（ロサーレスの調査によれば、クツァン地元民800人に対してサン・ペドロへの移住者は48人と少なく、その逆の移民の流れは明記されていない〔206頁〕）などから、これらを決定的な根拠とするには難がある。また、既存の学術研究により、中米先住民のアイデンティティを強く規定するのは小規模の村意識であることや、アティトラン湖畔周辺に居住するマヤ系先住民には湖南から吹き込む「邪悪な風」を忌避する民間信仰（つまり湖南＝邪悪）があることが指摘されている。こうした先行研究も考慮しつつ、サン・ペドロとクツァンが従来の村概念では括れない有機的な繋がりを持った互換的共同体だったと証明するには、コフラディアにおける具体的な宗教的・社会的実践やその根底にある思想の特色や変遷を歴史的文脈に沿って明らかにしなければならない。

そうでなければ、サン・ペドロ村民がクツァンを「植民地」と認識していたわけではないにしても、サン・ペドロの下位に位置する村と認識していた可能性は残される。この視点から本書で示されたロサー

レスの動向を再解釈すると、彼は暗黙の了解でサン・ペドロを「本村」と見なし、その視点から「分村」たるクツァンを見据えていたからこそ、移民の「サン・ペドロ化」に強い関心を抱き（199頁）、サン・ペドロからクツァンへの移民を「サン・ペドロ人」と見なし（206-208頁）、あえてドラフトに「クツァン部落のみが、言語、伝統的慣習、衣装など、サン・ペドロのものを維持している。人口がすべてサン・ペドロの子孫だからである」（205頁）と記述したのだと説明し得る。これらの点を踏まえて私たちは、著者によって提示されたこのオリジナリティ溢れる学説を補完・再検証しながら、この課題のさらなる解明に取り組む必要があるだろう。

それにしても、異文化社会を理解するための学問（20世紀前半のアメリカ人類学）が現地の社会や文化の根幹部分をむしろ不可視化するという本書の内容には深く考えさせられる。特に結尾部分で明かされるエピソードはじつに悩ましい。アメリカ人類学を知らなかったがゆえに「一流の人類学者」たり得たロサーレスは、やがてシカゴ大学に招かれて本場の学問に勤しみ、本物の人類学者となって故郷グアテマラへと凱旋するのだが、皮肉にもその過程で彼は大切な「虫の眼」を失ってしまうというのである。それでは、人類学者であれ、歴史学者であれ、異文化について学ぼうとする私たち研究者は、対象となる人や社会とどのような関係性を切り結び、どのような方法で「虫の眼」を会得しつつ学問を深めていくべきなのか。期待される本書の続編において、ぜひとも著者のご意見をうかがいたいところである。（有志舎、2013年3月刊、四六判、297頁、2800円）